

# 経済史から見た法制度の変遷：中世(761年～1390年)

児 島 秀 樹

## 要 旨

中世の第1紀(761～970)にはイスラーム社会で法が形成され、学説も登場した。ビザンツ帝国ではギリシア語でバシリカ法典が整備された。第2紀(971～1180)には、中国では義荘のような儒教的結びつきが強くなった。ウラマーとスルタン、ローマ教皇と神聖ローマ皇帝のように、宗教と世俗の対立と共助のシステムが作られた。第3紀(1181～1390)には、官僚達が宗教の法や君主の法を整備し、そのための教育施設が普及した。

それぞれの地域、宗教によって、異なる歴史が展開した。しかし、各地で苗字をもった家族が生まれ、領域の統治のために法令や判例が整備され、専門の法律家・聖職者が生まれ、宗教と世俗権力が対立しながら助け合った姿を見ることができる。

キーワード：法の経済史、政教分離、法律家、判例法

## <0.0> 本稿の扱う範囲

前稿までに、先史時代、古代初期(前1130～前501)、古代中期(前500～後130)、古代後期(131～760)を扱った。<sup>(1)</sup>この論考では中世(761～1390)を扱う。ただし、「先史」「古代」「中世」や初期・中期・後期を時代区分としては考えていない。古代や中世という言葉は多くの人に伝わりやすいという意味で利用しているだけである。「中世」という言葉で多くの歴史研究者が思い描く事柄は760年以前にもあるし、1391年以降にも中世的要素はかなり強力に存在する。

中世の区切りとして、第1紀：761～970年、第2紀：971～1180年、第3紀：1181～1390年

と、各紀を210年(70年×3)で分けている。70年は人が歴史の中で生きていられる長さを念頭に置いている。第1紀、第2紀の開始期には大きな政治的変動が見られる。第3紀の始まりは事件史的には静かであるが、千葉2019は1187年を中世の転換点と考えた。

## <0.1> 問題意識

歴史は過去のものであって、現代社会の生活に歴史は何の意味もなく、ただの教養の一つに過ぎないと思い込んでいる人が多い。しかし、歴史研究の醍醐味の一つは、彼らと同様に「思い込み」だけで生きている歴史上の人々が、その時々悲惨な戦いの末、新しい思い込みを作り上げているのが歴史であると知ることであ

る。自分の世界観にしがみつく人が多いため、無益な争いが生じた。

個々人には、才能や体力のある・なし、見かけの良し悪しなど、差別意識をくすぐるいろいろな特徴はあるものである。しかし、世界が一体化している現在、差別より前に、個人の尊厳という言葉をも身につける必要性がある。自分と異なる他者を見下すより前に、彼らとともに生きてみよう。「ならずもの国家」などと、自分とは異なる社会集団を悪者扱いする前に、自分に対するのと同様に、人としての敬意を払おう。それだけのことで、平和な社会が生まれる。

世の中には、平和な生き方の、この基本を否定する一群の人がいる。最近ではソシオパスとも言われる、そのようなタイプの人たちがいること自体は、人類の生物学的特性であるとも言える。政治的に、そのようなタイプの人間を選ばないようにしようという本も出版されるようになった（エディ2020）。彼らは個人的・集団的暴力を使ってでも、自分の利益を守ろうとする。これは法が生まれる一つの理由である。

中田2015（p.43）はイスラームの研究から西洋の一部の知性を批判する。「自分たちが抑圧する内なる未開、野蛮を幻想のオリエン트에投影」しているのがオリエンタリズムであると。端的に言って、自分のうちなる悪を、相手の悪として描き出した。この<sup>かんせい</sup>陷穽に陥らないようにすべきであるが、他者は世界観や概念の区別の仕方が自分と異なるので、他者の理解は容易ではない。心理的問題ではなく、外国語を十全に理解し、外国語で自己意識を表現するのが困難であるのと同じである。

## <0.2> 政教分離

中世の西欧で政教（政治と宗教）が分離し始めた。現状、政教分離が正しいと教えられる。

しかし、その政治と宗教という言葉が持つ要素は多様である。

中世では、権威（宗教）が権力（政治）を正当化する体制が整った。権力の庇護のもと、権威は共同体を統合し、まとめた。武力で秩序が保たれたので、たいてい権力が優位にたったが、統治のためには、智者としての官僚が必要であったので、地域によって、異なる結果が生まれた。日本では、王法（世俗権力）と仏法（寺社勢力）が相依する（互いに頼り合って生きていく）という体制が11世紀に生まれていたという説がある（佐々木2002、p.39）。

本稿での中世第1紀（761～970年）に君主を神にしようとする活動が見られた。第2紀（971～1180）には、神になった君主と対抗できる宗教を分離しようとする活動が見られた。イスラーム圏では、カリフの地位は低下し、君主の地位が高まると同時に、ウラマー層が形作るイスラーム法思想の中でカリフの地位が定められるようになった。ウラマーは「知っている者」（智者）という意味にすぎなかったが、次第に、一つの社会階層になった。ウラマー層が法で組織を維持し、君主が諸国をまとめた。

第3紀（1181～1390）には宗教は君主のもとで法体系を整備するか、あるいは、宗教施設で修行に励むかの二者択一を迫られた。君主が統治する領域が生まれてくると、その地理的境界線が意識されるようになる。中世の間は領主や村落・都市共同体の法領域が機能している。

## <1.0> 中世の国家

中世の国は現代の国家の枠組みとは異なる。中世で国家であると考えられる要素をいくつか取り出してみよう。

### <1.1> 暦を共有する

「正朔<sup>せいさく</sup>を奉ずる」という言葉がある。正月は1月、朔日は1日で、正朔は年の初めである1月1日を意味する。奉ずるは承諾し、受け入れること。古代、新しい王が立つと、暦を改めた。この句は王の統治に服従し、臣民となるという意味で使われる。古松2020 (p.54) によると、安史勢力の残党を中核とした幽州、成徳、魏博節度使の、いわゆる河朔三鎮<sup>かさく</sup>は徴収した税収を中央政府に送らず、官吏や軍人の任用を独自におこなって、唐朝の正朔を奉じつつ、事実上、独立割拠した。このような勢力は世界の多くの地域で見られる。

国王の治世何年といった形式の王の暦は近現代まで続くが、西アジアの宗教はこのような暦を否定しようとした。525年に南ロシアの修道院長ディオニュシウス・エクシグウスによってイエス・キリストの生誕（受肉）を基準にした暦が提案され、ペーダ・ヴェネラビリス（674～735）の『イギリス教会史』（731年）がそのタイプの暦を広め、最終的にフランス革命頃に西暦が受け入れられた（マイアー1999、pp22-57）。イスラームでも西暦622年にムハンマドがメッカからメディナに移住したヒジュラ（聖遷）の年が元年とされた。

現在、キリスト教国が優勢であるため、世界で西暦が利用されている。中世の帝国では宗教暦が共有されがちである。他方、君主の暦を共有すると国民意識が生まれる。古代のローマ皇帝だけがキリスト教に反対したのではない。国民は暦と時刻を共用する。その国民意識を維持しながら、宗教の暦を正当とする意識を持つのが困難であった。

### <1.2> 文を共有する

文武の中で、平等や平和を重んじる立場を文とする。中世には、文の中心勢力として智者

（宗教家）がいた。国内に複数の宗教信者がいると、平和を求める宗教家が国内での覇権をかけて相争った。宗教は所属意識<sup>あいあらせ</sup>を高めるため、年中行事や冠婚葬祭、典礼や儀礼を重視し、人々の仲間意識を刺激した。

智者は共同生活集団を作り、人々を指導した。その力は武（政界）からも認められた。文は子どもの教育も受け持って、力を伸ばした。文字・思想・知識などで構成される文化は宗教で伝えられた。宗教は「文治教化」に携わった。

### <1.3> 武を共有する

文の対極にあるのが、刑罰や威力を押しつける武力であり、その統治の基本的手段は刑法（律）である。ソシオパスに対抗すると同時に、自分もソシオパスになる可能性が高い人々の組織が武装集団であり、そのトップに国王や皇帝が位置する。中世において、トップに皇帝が配置される帝国では、国家の境界があいまいになる。トップに国王が配置される王国では、国民を国王以下、貴族や庶民等に階層分けして、身分として固定する、安定的で硬直的な国作りが行われた。

### <1.4> 経済と税金

経済的なまとまりは、領域を作る。領域の作り方で中世の性格が変わる。関税を徴収する場があれば、それが領域になる。世界の大半の地方で、都市毎に関税が徴収されるか、あるいは、裁判領主毎に関税が徴収される。中世では多くの場合、国王に代わる裁判権を持つ領主が、このような領域を作る。中世は領域という単位の国が寄せ集まる。

関税は税金の一種である。領域の主（Lord）は関税を徴収できても、税金は上位の身分に譲る必要があった。現在、地方自治体が徴収する

税金と国家が徴収する税金があるように、中世でも最終的には国王が税金を徴収する。国王の他に、皇帝や宗教界のトップも、配下の領域（彼らの帝国）から税金を徴収することがあった。ル＝ゴフ2014（p.20）によると、税関が確立し、ヨーロッパで国家的な経済が形成されるのは13～14世紀であるという。近代国家は税金を徴収する権限を独占しようとするが、中世では領域や荘園が税金徴収主体であった。軍事力のあり方も税金の徴収法と同様である。

## ＜2. 0＞ 中世法制定の責任者

中世社会では宗教・教育と政治・行政の担当者が分裂する傾向がある。欧州は分裂した。欧州は小国に分裂したように、他者の排除意識が強い。その他の世界は分裂しないで、宗教的に法制度が整備された。

### ＜2. 1＞ 宗教の意味

古代後期の教学が中世では、特定の学派への信仰心（宗教共同体への所属意識）として集団原理を形式化していき、世俗の内容を整備するため、その正統化原理を伝統や慣習に置くようになった。信仰心は所属意識とほぼ同義である。

千葉2019（pp.7-8）は現代の宗教（religion）の語源となった中世ラテン語のレリギオ（religio）の意味をとりあげる。レリギオには信仰、敬虔さ、神への畏怖、供儀、礼拝等の意味がある。

三上2013（p.154）によると、レリギオの語源として、前1世紀のキケロに遡る‘relego/relegere’（読みなおす）説と、3世紀末のラクタンティウスに遡る‘religo/religare’（結びつける）に求める説がある。キケロは迷信と対立する知性にもとづく敬虔な態度を表わす語とし

て、ラクタンティウスは自分達を敬虔な絆で神と結びつける語として、レリギオを理解した。アウグスティヌスはこれを検討して、迷信を棄てて、神と結ばれることを「選ぶ」ことで折衷的理解に至ったとされる（三上2013、p.159）。

### ＜2. 2＞ 宗教と法

政治の世界ではトップ争いは苛烈である。君主はトップの座を維持するため、その地位に自分が就任していることの正統性を神に求める。もちろん、武力で制圧していることが前提になっているので、制圧された勢力圏の中での支配の正当化理由である。その正当化をシステムとして、統治手法に組み込む必要があり、神の掟を聖典から読み取る専門の法学者（聖職者）が君側の奸と罵られながら、君主を取り巻く。「結びつき」、すなわち中世の共同体意識を強めるため、異端・異教徒が排除され、多数派の宗教儀礼を受け入れなかったら、租税も差別的に徴収された。フラタニティやワクフというNPO組織を利用して、神をたたえるために寺院や教会が建立され、その組織内で身体障害者、老人、病人、貧民など、弱者の保護が実現された。弱者を見捨てると共同体が壊れる。

イスラームの法はシャリーアであると説明される。しかし、シャリーアを普通名詞として使えば、「イーサーのシャリーア」（イエス・キリストの教え）という意味で使うこともできる（中田2015、p.3）。シャリーアは教えなので、人びとが従うべき行為規範であったとしても、国家の脅しで強制される法ではなく、倫理に近い。

アラビア語で人定法はカーヌーンと訳される。これはギリシア語圏の法をアラビア語化した言葉であって、もとをただせばカノン（比率、聖典）である。カノンは中世の間に、ヨーロッパではcanon lawとなる。これはほぼ教会

法であり、人定法ではあっても、国法とは異なる。ちなみに、トルコのカーヌーンという楽器も語源は同じである。

西洋法学に親しんだ日本人にとって、人定法は国家の法であると理解されるが、中田2015 (p.58) はカーヌーンを国法であると考え、イスラームの根本教義に反する背教に当たるといふ。カーヌーン（人定法）がシャリーアをフィクフ（理解）した行為規範とは限らないからである。

この論考では、言葉の使い方として、倫理は法源ではあっても、法とは考えない。特定の範囲の集団に（国内で）強制される規範を法と考えて論述する。西洋の影響を受けた日本語の一般的用法でいえば、宗教の歴史ではなく、法学・法律の歴史を論述する。

### <3. 0> 各地の帝国の維持と崩壊

以下で、東アジア（中国）、西アジア（汎ギリシア圏も含む）、ヨーロッパに関しては個々の歴史をとりあげる。しかし、南アジアや中央アジアなど、重要な歴史的地域であっても、扱っていない地域もある。

#### <3. 1> 東アジア：罪刑法定主義、科挙

地域としての東アジアは東アジア文化圏、漢字文化圏などと表現される（李2000、pp.7-8）。その場合の特徴は、中国を発祥地とする漢字、律令、仏教・儒教・道教といった文化を受容した地域である。律令の律は刑罰体系、令は行政法的に国家機構や租税・土地制度などを規定する。

中国の刑罰体系と罪刑法定主義の関係を少し見てみよう。犯罪とそれに対応する刑罰は唐律として、成文法化していた。法の執行者自身が自己の利益をはかって、恣意的に罪を作ること

（罪刑専断主義）を禁止する、すなわち、罪刑法定主義を君主権力を排除するという意味で理解した場合、中国では遅くとも唐の時代から罪刑法定主義であったと言える。しかし、中村は中国では法家思想の画一性・明確性・安定性が尊重されていただけで、国民の自由の保障を規定したものではないので、罪刑法定主義とは本質的に異なると主張する（石岡2012、p.134）。ただし、個人の自由の保障は西欧でも近代社会以降の話である。

ソグディアナから1000kmほど南方、現アフガニスタンのガズニ、または、その東方キルギスのスイアブ（碎葉）の出身ではないかと見られている李白（701～762）は唐の代表的詩人として活躍した（妹尾2020、p.214）。科挙の進士科の試験では、定型詩の作成が出題された。現代の裁判官が説得力のある判決を書こうと文を練っているのと同じである。判決の強制力を受け入れさせ、人をまとめるために、作詞の力は欠かせなかった。

中国の司法制度の内容は石岡2012（第4～7講）が簡潔に説明している。中国では損害賠償や不法行為にあたる民事事件はなく、同じ案件でも、すべて刑事事件になった。民事的に損害の賠償もある。しかし、刑罰が与えられる事件が裁判所で扱われた。王朝の組織が罰を与えない程度の違法行為（債務不履行、不法行為）は村落共同体や商人集団等、現場の調停・仲裁で解決していたのかもしれない。民事を扱う西洋の荘園裁判所やギルド裁判所は王朝の組織ではなく、地方共同体の組織である。

漢代から明代までの官庁組織の一つに九寺がある。これは丞相（首相）が管轄した。この「寺」という言葉は仏寺ではなく、官庁を意味する。その一つの大理寺が司法の役割を果たした。唐代に吏・戸・礼・兵・刑・工といった6つの官庁である六部ができると、その一つの刑



部が司法の役割を果たした。地方の裁判官と中央との関係は、現代の審級制ではなく、罰の重さによって、裁判管轄権が異なる制度が採用された。西洋でも流血裁判ができるのは上級領主に限られたのと同様である。

むち打ち刑である笞刑<sup>ちけい</sup>、それより厳しいが同じくむち打ち刑である杖刑<sup>じょうけい</sup>にあたる罰の場合は、犯罪が生じた県で処理した。上級審はない。現代の懲役刑に近い徒罪<sup>とざい</sup>にあたると県が判断すれば、州に送られる。州は徒刑まで執行できた。受刑者は配軍と称して、軍隊に編入されることもあった。彼らは廂軍（地方の軍隊）に配属された。中央の軍隊である禁軍に配属されることはなかった。流刑以上は刑部が裁いた。

### <3. 1. 1> 第1紀（761～970年）：家族の法

中国史では安史の乱（755～763）から熙豊変法<sup>きほう</sup>（11世紀後半の王安石の変法）の時代を唐宋变革期と理解することが多い。

石岡2012（pp.182-203）に従って、中国の家族法を確認してみよう。ただし、現代の家族とは異なる。中国の家族に名（姓）があるのは、世界でも珍しい。古代の氏族制の名残かもしれないが、宋代以降、宗族として主に中国南部の地域社会を家族的にまとめる紐帯になった。仏教・道教には仏寺・道観があるのに、儒教にはそのような施設がないことにも関係しているのであろう。家族・宗族が祖先を祀る。

中国では古来、同姓不婚が原則である。同じ姓のものとは結婚できない。例えば、唐戸婚律33条で、「同姓の者と婚姻をした者は、それぞれ徒2年に処する」（石岡2012、p.183）。徒2年で処罰されるのは主婚<sup>しゅこん</sup>であった。主婚は西洋なら家父長と表現される。主婚が婚姻の責任ある当事者であった。

母は父と同じ宗族の一員として扱われるが、母の姓は変わらない。夫婦別姓が原則であり、

子は父の姓を継承した。離婚も可能であった。唐戸婚律41条で、夫婦の感情が調和せず、合意のうえで離婚する場合には、罪としない（石岡2012、p.191）。

日本の裁判離婚と同様に、離婚が許される場合が規定された。離婚は七出<sup>しちしゅつ</sup>と義絶<sup>ぎぜつ</sup>に限られた。七出は1）男の子がいない（無子）、2）不倫（淫佚）、3）夫の父母に仕えない（不事舅姑）、4）おしゃべり、5）窃盗（盜窃）、6）激しい妬み（妬忌）、7）悪い病気（悪疾）、である。義絶はDVに近い概念である。妻が夫の家族を殴・傷・姦する行為が問題にされた（大澤2021、p.201）。

1人の男子は1人の妻と結婚した。2人目からは妾と呼ばれたが、正妻と同じ位置付けにあった。妾も夫と同居し、その子も嫡出子となった。一夫一妻多妾制である。

居住形態はいろいろであるが、家産は「同居共財」として考えられた。兄弟夫婦も同居した場合、彼らのものも「家産」である。家産の管理・処分権は家長だけにあった。家長は最年長の男性になった。家長以外の者が家産を処分する権限はなかった。家長が死亡した場合、「家産均分」が原則であった。家産を兄弟の間で均等に分割した。ちなみに、西欧では均分相続より長子相続が多い。

女性は相続者にはなれなかったが、嫁入り財産<sup>しやうれん</sup>（粧奩）は特有財産として、家産分割の対象にはならなかった。男子のいない寡婦は、夫の継承分を取得した。寡婦が家産を自分のものとして相続したのではなく、養子をとって、その養子に祭祀と家産を継承させた。家産の継承というより、祖先祭祀を継承させて、家を存続させることがもっとも大きな価値が認められた。祭祀を受け継いで、家産も継承した。社稷を重んじる国と似ている。

安史の乱での支出をまかなうため塩の専売制が考え出された。専売収入は政府の全収入の半分を占め、残り半分が直接税の両税法である。780年、宰相楊炎（727～81）の提唱で、租庸調制が廃止され、両税法が開始された。それまで、本籍地を単位に税金を課していたが、現に耕作している農民の土地所有を認め、本籍地主義から現住地主義への転換をはかった。これで、税金は土地面積や生産力に応じて、夏と秋に2回、銅銭で収めることになった。塩の専売制の開始で、塩の密売者が処罰されることになった。両税法と専売法は宋代にも受け継がれた。

官僚機構も変貌をとげた。三省六部以外に設置された使職<sup>ししよく</sup>が登場して、膨大な官僚が生まれた（礪波1997、p.218；梅原1997、pp.93-99）。使職は皇帝の特使として臨時に派遣される者で、その肩書に「某々使者」と表現された。玄宗時代に節度使、租庸使、塩鉄使など、軍事・財政の特別任務に就いた使職が置かれた。軍人や宦官が就いた使職は北宋時代まで武臣の位階として残存した。

### <3. 1. 2> 第2紀（971～1180年）：族的共助組織、管轄権

北宋（960～1127）の首都・開封<sup>かいほう</sup>は大運河と黄河をつなぐ位置にあり、中国の東西南北をつないだ。各地の都市では行や作と呼ばれた商人や手工業者の同業組合が結成された。

官僚は科挙試験で登用された。儒学の經典<sup>けい</sup>の理解を問う科挙試験の受験資格は男性であり、賤民ではないことであった。科挙に合格するほどの儒学の素養がある階層は士大夫と表現された。士大夫の中でも有力な層は形勢戸とも呼ばれた。一般の民戸と区別して、戸籍上、形勢戸と朱書された。官僚の多くは形勢戸出身であった。官僚は徭役を免除されて、官戸と呼ばれ

た。彼らは、各地に田畑を購入し、それを佃戸（小作人）に耕作させ、小作料と称して農作物を徴収した。形勢戸が農作物を市場で売買し、利益を得た。

宋の初代皇帝趙匡胤（r.960～976）は科挙の最終試験として殿試を導入した。官僚のトップ候補を皇帝が面接する試験である。宋代の儒学者は道教や仏教を攻撃した。道教や仏教は社会からの逃避を目標としていると非難された。欧陽脩（1007～1072）の『新五代史』や司馬光（1019～1086）の『資治通鑑』がその代表例であった。

唐代の訓詁学にかわり、宋代では、道学・理学と呼ばれる学問体系が生まれた。道学は倫理、理学は科学に近い。

北宋第4代趙禎・仁宗<sup>ちやうてい じんそう</sup>（r.1022～63）の時代、慶曆<sup>けいれき</sup>の新政と呼ばれる改革が試みられたが、1年あまりで失敗に終わった。この改革を進めた官僚として、范仲淹（989～1052）と欧陽脩（1007～1072）がいる。官僚の中で党派争いが激しくなったとき、仁宗は、古来、小人の多くが朋党を作ると言われるが、君子（才徳の優れた人物）の党もあるのかと疑問を持った。欧陽脩が『朋党論』を著して応えた。君子は道を求めて君子と、小人は利を求めて小人と朋を作る。小人は祿利<sup>ろくり</sup>を好み、財貨<sup>わさば</sup>を貪る、と。

1043年に慶曆新政が実施された。1）年功による定期的昇進ではなく、勤務成績や才能による昇進<sup>ちやうつちやく</sup>（明黜陟<sup>めい ちつしやく</sup>：黜＝降下、陟＝昇進）、2）高官の子弟・親族に官職を与える恩蔭<sup>おんいん</sup>制度の制限、3）経世済民の実務を実行できる人材を登用するための科挙試験の改革、4）適材の推薦、5）地方官の職田の公平支給、6）農業振興、インフラ整備、7）強兵節財策、8）人口に応じた徭役、9）大赦による恩沢の遵守、10）官僚の起案を中書、樞密院で検討・審議した政令の施行、といった改革を進めた（竺沙1995、

pp.187-193)。

范仲淹は後樂園という名称に使われている「先憂後樂」で有名である。天下の憂いに先んじて憂え、天下の楽しみに後れて楽しむ。「先憂後樂」は士大夫官僚の座右の銘とされた(竺沙1995、pp.211-214)。范仲淹は義莊を案出した。これは西欧の兄弟団(フラタニティ)やイスラームのワクフと同様のNPO的組織であるが、義莊では族(宗族・家族)を単位とした儒教的な相互扶助組織となった。ちなみに、ワクフは喜捨(ザカート)の精神に基づく寄進行為で、アラビア語で、停止(所有権の移動の停止)を意味する。

義莊は一族を救済するため、共同で使える財産としての田土(義田)と、その収益を分配するための建物(義莊)からなる。近代までこれが中国式の親族の相互扶助組織として続いた。房(共同生活体)ごとに、家族や奴婢に対する義米の分配、婚資や葬儀費の支給、貧困の救済手法などが決められた(竺沙1995、pp.221-226)。

宋では郊祀のような祭祀で民の統合を象徴する儀礼を行っても、それでは足りなくなった。日々の修養による仁政が大事にされるようになり、孔子の言葉、「私は訴訟沙汰自体をこの世からなくしたいのだ」という文章は、地方官が下す裁判の判決文でしばしば引用された(小島2002、p.77)。

裁判の管轄権に関して、宋の時代には全国に通用する海行法と特定の地域や官庁・行政分野に適用される一司勅が区別された。「一司一路一州一県勅」とも総称され、一つの地域の勅令=特別法である。

宋では断例も重視された。類似の案件が生じたときそれを例と呼び、活用した。現代の判例と同等である。法律は制定法になると、かなり抽象的であるため、解釈しだいで黒も白にでき

る。その場合、既存の類例は参照価値を持つ。しかし、判例主義は「用例破法の弊」として問題視されることもある。文書管理担当の胥吏が不正な先例操作を行い、判例を捏造した(川村2022、pp.245-246)。

宋は周辺諸国との抗争のため、多額の軍事費を必要とした。神宗(r.1067~85)の時代には、戦争による財政難を開解するため、王安石(1021~86)が抜擢された。19歳で即位した神宗は官僚2万人、常備軍兵士150万人をかかえて、膨張した国家組織の立て直しを図った。王安石は1070年から新法を施行した。王安石の新法だけでなく、中世国家の法や勅令はたいいてい君主とその側近による国家作りのための法を意味している。法には刑罰の他に、民の間の争いを裁く法・判例と、官僚制度を整備する行政法分野の法・令がある。

新法は貧民の救済をはかるため、商人や地主が得ていた利益の多くを政府の収入にしよう、というものであった。青苗法は、政府が貧農に低利で融資するというもので、銅銭で貸し付け、穀物で返還させた。新法によって、各地で水利工事がおこなわれ、農業生産が増大した。租税収入も増えて、財政が潤い、軍備強化が可能になった。

### <3.1.3> 第3紀(1181~1390年):天による統治

北宋の時代から緯書や五行説のような呪術的な発想は好まれなくなった。呪術や儀礼ではなく、争い事を未然に防ぐために、為政者が民衆に向かって教誨を垂れるようになる(小島2002、p.72-77)。朱子学の「修己治人」(己を修めることで、人を治めることが可能になる)という教えの下、五倫(親・義・別・序・信)の秩序に従って、為政者は王朝の維持のため、理に従って政治を行う必要があると考えられた。



五倫は親子の仲を大事にし（親）、社会秩序・平和を重んじ（義）、多様性を大切に（別）、長幼の違いに思いやりを持ち（序）、親友を裏切らないようにしよう（信）、といった意味になる。

南宋（1127～1276）の朱熹（<sup>しゅき</sup>1130～1200）は江西省南康を預かる知事を務めたとき、理を重んじる行動に出た。ある権勢家の子弟が町中で子供を馬ではねて、重傷を負わせた際に、朱熹は罰を下せない胥吏を叱咤し、杖刑に処した（溝口1997、pp.309-310）。現代でも法や道義より人脈・利益を重んじる人たちがいるが、そのタイプと異なり、朱熹は理を重んじた。一神教の神と同等の、正しさの判断基準になるものを、朱熹は天と表現した。

朱熹の<sup>しゃそうほう</sup>社倉法は1181年から各地で実行されることになった。これは<sup>ぎそう</sup>范仲淹の義荘に似ている。義荘は宗族内の相互扶助であるが、社倉法は郷村の指導者に扶助を期待した（溝口1997、p.311）。村落共同体が相互扶助組織となる。郷村の指導者には父母への孝順（親孝行）、長上（目上）への恭敬、宗姻（宗族）との和睦、郷里の<sup>しゅうじゅう</sup>周卹が求められた。卹は<sup>じゅう</sup>恤の異体字で、「困っている人に金品をめぐむ」ことである。周卹は<sup>あまね</sup>救恤を周くゆきわたらせるという意味になる。

現代の社会福祉にあたる事業の責任単位は時代によって異なる。中世では宗教団体（寺院、修道院等）や共同体（村落の教区や商人・手工業者組織）が<sup>こうきょう</sup>なる事例が多い。

北宋で、玄宗が注釈した『孝経』が重んじられていた。朱子学と呼ばれる朱熹の儒学は、当初は、異端とされたが、明・清時代には、正統な学問として受け入れられた。朱熹は『礼記』の一部であった『大学』と『中庸』を独立させ、『論語』『孟子』とともに四書とした。『大学』は政治学、『中庸』は道德学に近い。西欧のリ

ベラルアーツのように、朱熹は学習の順序も考えた。經典を教科書として、初等教育では『小学』を教科書として学び、次いで、四書、そして、五經へと進む、と。『大学』で学問の枠組みを定め、『論語』で学問の根本を立て、『孟子』で学問の情熱を感じ、『中庸』で個人の奥深いところを追求する。朱子学は最高的人格を聖人とする。聖人が社会のリーダーとなり、君子が果たすべき責任を考えた。（矢羽野2016、pp.22-24）

宋に代わって華北を統治していたツングース系女真族の<sup>しょうそう</sup>金の第6代章宗（1189-1208）は唐律をもととして、1201/02年、<sup>たいわ</sup>泰和律令を整備した。しかし、章宗死後の帝位争いにモンゴルが介入するようになり、金は1234年にモンゴルに倒された。

モンゴルの<sup>せいそ</sup>世祖フビライ（r.1260～1294）は民を<sup>たん</sup>徭役の種類で分けて、<sup>オルタク</sup>軍戸、<sup>たん</sup>站戸、<sup>オルタク</sup>斡脱戸、<sup>たん</sup>医戸、<sup>オルタク</sup>民戸などに編成して、世襲身分とした。軍戸は漢民の武官、站戸は駅伝の維持者、西域商人の斡脱戸は主権者が出資する銀を運用して利殖する者である（斯波1997、p.491）。この制度は、世祖が民に「徭役」を割り当てて、軍人、郵便局・運送業者、金融業者を代々世襲させたようなものである。社会全体の秩序の中での、下の希望と上の是認の軋轢にもとづく構造を法的にどのように表現するか。ここでは「徭役」と表現された。

モンゴルは1271年に国号として<sup>グヤン</sup>大元ウルスを名乗り、1279年には南宋を滅ぼした。大元は法を整備しようとしたが、実現はしなかった。大元では単行指令が例としてあるだけで、「例あって法なし」とさえ言われた（川村2022、p.252）。イギリスの判例法であるコモン・ローと同等であったのかもしれない。

大元は当初、実力で人材を登用しようとし

て、科挙を実施しなかったが、1313年に科挙が再開された（渡辺2022、p.223）。儒教の教育は書院で実施され、多くは四書が教えられた（渡辺2022、p.223）。「中国古典学は、哲学・歴史・文学を問わず、そのかなりの部分が大元時代の完本を通じて研究されている」（宮2006、p.10）と言われるほど、大元で学識の普及が図られたのは確かであろう。

### ＜3. 2＞ 西アジア：共同体（ウンマ）

610年頃に、預言者ムハンマドが神の啓示を受けた。キリスト教徒やユダヤ教徒の結束に感銘を受けていた彼は仲間を共同体（ウンマ）としてまとめようとし、アラブ社会の統一を開始した。この時代にウンマに集まった人たちは、一つの神を「信じる者」「信仰者」という意味の「ムウミン」に過ぎなかったかもしれない。ウマイヤ朝（661～750）では、シリアのキリスト教徒が行政官僚として実務を支えることもあった。信徒はムウミンであって、キリスト教徒もムスリム（イスラームを信仰する者）もそれほど区別がつかなかった。

ムウミンが8世紀半ばまでに、ムスリムになった（亀谷2020、p.68）。ムスリムには服従・帰依した者という意味もある。クルアーンに載っている単語数で、信仰者は1000語ほど、ムスリムは75語に満たないという（ドナー2014、p.56）。

後継者（カリフ）に選ばれたアブー・バクル（第1代正統カリフ：r.632～634）は神の教え（クルアーン：コーラン）とムハンマドの言行（ハディース）でウンマをまとめた。ここからイスラーム法が始まる。ハディースは「語り」「おしゃべり」という意味なので、本来は誰の「お言葉」でもいいが、イスラームでは「ムハンマドのことば」になる（小杉2019、665）。

749年、アブー・アッバース（r.749～754）

がクーファでカリフとして即位した。750年にウマイヤ朝を倒し、アッバース家が支配する統一カリフ政権が成立した。

#### ＜3. 2. 1＞ 第1紀（761～970年）：イスラーム法の形成、『バシリカ法典』

ペルシア人がイスラーム法に基づくアッバース朝（750～1258）を開始した。アッバース朝ではカーディー（裁判官）が任命され、イスラーム法が適用された（堀井2004、p.57）。その第2代カリフ、マンスール（r.754～775）は762年、都のバグダードを建設した。

イスラームの聖俗（政教）の分離はアッバース朝の時期に行われたとも言える。国家（政治）の役割はスィヤーサ（行政）に限定されると理解された。その限定・境界が破られると、法学者はシャリーアを武器に、公益侵害に対して国家を抑制しようとした（堀井2004、p.61）。

イスラームでは8世紀以降、ウラマーと総称される知識人層が出現した。ウラマーの学問はコーラン解釈学、伝承学、法学、神学が中心となっていた（菊地2017、p.29）。マンスールの時代から、古代の哲学がギリシア語やシリア語からアラビア語に翻訳され始めた。イスラームが普及した地域では、アラビア語に翻訳された知識が伝播し、10世紀までにイスラーム圏の学問の基礎が築かれた。この学問はのちに西欧に伝わり、12世紀ルネサンスを生み出す。

アッバース朝は第3代のマフディー（r.775～785）と第5代のラシード（r.786～809）の時代に経済的にも順調に発展した。宗派対立に利用できるアリストテレスの『トポス論』がシリア語からアラビア語へ翻訳された。その三段論法がハディースの解釈に応用された。

第7代カリフ、マアムーン（r.813～833）も、「知恵の館」に学者を集め、天文学、数学、医学などを研究させた。マアムーンはカリフ権

神授の概念を打ち出し、ムウタズィラ学派を帝国の正統教義として採用した。彼は晩年に、ミフナと呼ばれる異端審問を開始した。ムウタズィラ学派は「正義と唯一性の主唱者」と自称し、善と悪、正義と不正は客観的に判断できると考えた。

三浦2020 (pp.15-16) はイスラーム社会の法源を4つ指摘する。イスラーム法はシャリーアと呼ばれる。シャリーアの原義は「水場」「水場にいたる道」である。シャリーアの第一の法源は「クルアーン」で、人間が従うべき道、神が啓示し定めた真理である。クルアーンは神が預言者ムハンマドを通して語った言葉が記録されたものである。クルアーンでは欲望は法に反する（小杉2009、pp.201-202）。

クルアーンで判断できないときには、第2の法源であるハディースがスンナ（規範）として用いられた。ここでイスラーム法として、六信五行の信徒の義務が語られる。六信は内面に関係するが、五行は信仰告白、礼拝、喜捨、断食、メッカ巡礼といった客観的行動に関係する当為ではある。しかし、これは法というより、イダーバード（儀礼的規範）にすぎない。

ハディースの中に商取引の話も出てくる（『ムハンマドのこぼれ』 pp.402-415など）。ムアーマラート（世俗的規範）である。売買は互いの納得で成立する。品物に瑕疵があれば、売買は成立しない。ガラル（先物取引のようにまだ手にしていない品物）の売買は禁止する。破産者に売られた品物の支払いが完了していれば、その所有権は戻らない。リバー（利子）は禁止する。

クルアーンやハディースは7世紀のアラブ社会の話が中心である。時代や社会が異なると、異なる社会問題が出てくる。そのときには、第3の法源であるイジュマー（共同体の合意）が参照される。イジュマーは実際には法学者の一

致した意見である。そして、第4の法源として、キヤース（合理的類推）が用いられた。

イスラーム社会には法典はなかった。しかし、『ローマ法大全』の『法学彙纂』と同様に、法学書がその代わりをなした。イスラーム法は10世紀までに学説の土台が完成したと言われる。

その頃までにスンナ派は四大法学派ごとに体系化された。ハナフィー学派、マーリク学派、シャーフィイー学派、ハンバル学派である。神学もいくつかに分かれ、アシュアリー学派、ハディースの徒（伝承主義）、マートゥリーディー学派などが知られている。

マートゥリーディー神学派はサマルカンドの神学者マートゥリーディー（944年頃没）を名祖とし、ハナフィー法学派と結びついて、トルコ、シリアから中央アジア、中国で有力となった。アシュアリー神学派はシャーフィイー法学派と結びついて、エジプト、東南アジアに普及した（菊地2017、pp.36-38）。

当初は、クーファのアブー・ハニーファ（c.700～767）を学祖とする一派が理性に重きを置いて、シャリーアを解釈した。このハナフィー学派はまずイラクで広まり、中央アジアに影響した。のちにオスマン帝国の公式学派となる。この学派のハッサーフ（c.797～874）は『カーディーの心得』を著わし、イジュティハード（神意を推し量る努力）による判決は、間違いを犯す人間がするものであり、特定の学説で他の学説を破棄できないので、カーディー法廷に管区はあっても、審級はないと論じた（堀井2004、p.121）。人間は互いに人間であって、神ではない。

マーリク学派はメディナのマーリク・イブン・アナス（c.710～795）が創始し、アラビア半島西部のヒジャーズ地方に広がり、北アフリカ、イベリア半島に普及した。シャーフィイー

学派はシャーフイー(767~820)が創始した。彼はフスタートにあった屋敷の分散を防ぐため家族ワクフを始めたと言われる。この学派のちに東南アジアに普及した。

アフマド・イブン・ハンバル(ハンバル派の学祖、780~855)以降、ハディースを収集する「ハディースの徒」が頭角をあらわした。ハディースの徒は伝承(ハディース)を重視して、ハナフィー派の理性重視を個人的見解(ラアイ)の徒として批判した。ハンバル学派はシリアで普及したが、のちに、ワッハーブ派と結びついた(菊地2017、p.103など)。ハディース学が成立発展するのは9世紀以降である(菊地2017、p.18)。伝承と理性が権威を争った。

東ローマ帝国では、イスラーム軍団がアナトリア半島に侵入していたので、7世紀半ばから、半島各地にテマと呼ばれる地方軍団が配置された。当初、軍団がギリシア語でテマと呼ばれた。しかし、初期のこの軍団ではなく、のちの行政管区を意味する制度をテマ制とよぶ。

8世紀半ばにテマ制が完成されたと言われる(根津2008、pp.27-28)。テマ長官は軍を率いて戦い、租税を徴収し、司法の責任者となった。兵士は従軍期間だけ給料を得た。兵士は土地を給付され、土地からの収入で装備を調べ、軍馬を用意した(ハリス2018、pp.125-126)。コンスタンティノス7世(r.913~959)の時代、東方、小アジアのテマ17、西方、ヨーロッパのテマ12、合計29の地域の記述がなされた。テマは属州程度のものになっていた(中谷2020、pp.150-151)。

『ローマ法大全』は741年にレオン3世(r.717~741)によって『エクロゲー法典』として、ギリシア語化された。のちに発布された新法も含めて、レオン6世(r.886~912)はギリシア語で『バシリカ法典』としてローマ法

を整備した。

井上1998(p.81-82)によると、『エクロゲー法典』では、結婚は教会の聖別で成立するので、教会が認めない男女の結合はすべて姦淫とみなされた。「神が結び合わせた者を人間が解いてはならない」として、離婚は原則禁止された(井上1998、p.83)。

821年から2年間の最大規模の反乱、スラヴ人トマスの乱が鎮圧されると、テマの反乱は事実上終息し、ビザンツ帝国はあらたな時代を迎えた(中谷2020、pp.83-84)。ビザンツ帝国では、皇帝が君臨する君主政体が常態となっていて、デモクラティア(デーモス=民衆、クラティア=支配)は君主の秩序が欠けた不測の事態を意味した(中谷2020、pp.95-96)。ちなみに、19世紀のイギリスでも民主主義は嫌われものであった。

キリスト教会の位階に従い、首都に総主教、属州の主要都市に府主教、各地の都市に主教が置かれた(和田2002、p.117)。教区内の信者間の争いの調停や裁定という裁治権は主教に与えられた。現代の裁判官と同様、主教は多くの世俗の問題も裁いた。主教も皇帝管轄下の国家教会に籍を置き、皇帝の宗教政策に協力することで、官僚として多額の報酬と多くの特権を得た(和田2002、p.117)。主教の下に、補祭、司祭が置かれ、彼らがミサで教誨をたれた。

古来、中国には姓がない時代はなさそうであるが、ギリシア人には姓がなく、個人名だけがあった。9世紀半ば以降、テマの高級軍人のなかに苗字をおびる者が増大した。ニケフォロス・フォカス、レオン・フォカスのように家系の古さを誇り、血筋の高貴さに強い自負を有する社会集団が生まれた。家門が形成され、11世紀までに貴族は苗字をもつようになった(中谷2020、p.167)。爵位は一代限りであって、世襲は認められなかったのも、固定的な身分ではな



い（根津2008、p.48）。井上2009（pp.279-280）によると、すべての人は皇帝の奴隷であると意識されたので、公的な場では苗字を使わなかった。公文書の署名・印章（判）に苗字が記載されるのは、11世紀後半からであった。

### <3. 2. 2> 第2紀（971～1180年）：学派と専門家の誕生

イスラーム世界は10世紀以降、ウラマーと軍人が連携する統治体制が始まった。法学的問題は10世紀までに論じ尽くされた（堀井2004、p.132）。教義を解釈する権利はカリフではなく、ウラマーに委ねられるようになった。

ペルシア系の哲学者イブン・スィーナー（1037年没：アヴィセンナ）はシーア派のイスマーイール派の父のもとで、学問に触れた。その著作の多くはアラビア語、一部、母語のペルシア語で書かれた。彼は、新プラトン主義的アリストテレス哲学の体系的な記述を行った（菊地2017、pp.44-45）。彼の『医学典範』は12世紀にラテン語に翻訳され、ヨーロッパの近代医学の誕生に貢献した。

セルジューク朝君主が1055年、スルタン（執政者）に任ぜられた。スルタンはカリフの権威のもとで実権を握った。しかし、教義の決定権はウラマーにあったので、事実上、スルタンはウラマーに担ぎ上げられることになる。シャーフィイー学派の法学者マーワルディー（1058年没）などのウラマーは、カリフ制をイスラーム法学上、唯一合法的な政治制度として擁護し、カリフは任官を通じて、権力者・覇者であるスルタンの支配を合法化、追認していた。これは西欧の叙任権闘争の原因と似ている。

1071年に、現在のトルコの東端、マンツィケルト（マラズギルト）で、東ローマ皇帝ロマン4世（r.1068～71）がセルジューク朝スルタ

ンのアルプ・アルスラン（r.1063～72）と戦った。東ローマ軍の親衛隊はほぼ壊滅し、皇帝は捕虜になった。以後、小アジアでは、ギリシア系貴族がトルコの協力を仰ぐことも頻発するほど、ビザンツ帝国は軍事的に崩壊状態に陥り、1081年にはトルコ軍が小アジアのほぼ全域を制圧した。アナトリア半島西端のニカイアにセルジューク朝の都が置かれた。

トルコ人の国はローマ帝国を奪い取ったので、ルーム・セルジューク朝と呼ばれることがある。アラビア語、ペルシア語、トルコ語で、ローマは「ルーム」と表現された。アナトリアはギリシア語で東、文字通りには、「日出ずる所」を意味している。

アルプ・アルスランとマリク・シャー（r.1072～92）に仕えた名宰相ニザームルムルク（r.1063～92）は各地にニザーミーヤ学院を建設した。彼はウラマーを雇用し、国家の保護を与えた。学院ではクルアーン、ハディースが学ばれ、神学、法学、霊学が教えられた。ニザーミーヤ学院はマドラサの一つである。

現在、イスラーム圏の義務教育で神学、法学、霊学が教えられているが、その形式は中世のマドラサから始まっている。法学はイルム・フィクフ、神学はイルム・ウスूल・ディーーン（またはイルム・カラーム）、霊学（スーフイズム）はイルム・タサウウフである。アラビア語のタサウウフの指導者がスーフィーなので、タサウウフは英語でスーフイズムと表現される。

イルムは「学問」、フィクフは「理解」であって、理解学である法学（イルム・フィクフ）はシャリーアの学ではない（中田2015、pp.18-19）。教え（シャリーア）に従った具体的な行為の中で、認められるのは何か。正しい行為規範を導き出し、発見する学が法学である。法学は「個別的な典拠から演繹されたシャ

リアに基づく行為規範の学」と定義される（中田2015、p.19）。

ジュワイニー（1085年没）がニーシャープール（イラン北東部）の学院の初代教授となった。各地で、アシュアリー神学派がカリキュラムに採用された。ジュワイニーを継いだガザリー（1111年没）はアシュアリー神学派、シャーフィイー法学派の精鋭として、ニザームルムルクの宮廷で活躍した。ガザリーは33歳で、バグダードのニザーミーヤ学院教授に就任した。しかし、宰相ニザームルムルクとスルタンの暗殺・変死によって、ガザリーは教授職を辞して、スーフィズムに新たな活路を求めた。彼の死後、神学の哲学化が加速した（菊地2017、p.35）。

東ローマ帝国ではコンスタンティノス9世（r.1042-55年）が1047年、首都に2つの国立の学校を設立した。そこで、法学と哲学が教えられた。新しい法律学校で法律家が養成された。公証人（ノタリオス）と法曹家（シュネゴロイ）である。両者とも、同業組合に組織されていた。（ヘリン2010、p.112）

11世紀半ば、貴族の反乱は皇帝が気前よく与えてくれる官位を求めてのものが多かった。しかし、11世紀後半になると、穀物専売政策への不満を表明するといった、貴族の領地経営に対する圧力への反乱が増えた（井上1998、p.148）。以前の爵位には、年金が付属していた。コムネノス朝（1081～1185）では国家の財政負担を減らすため、年金の付与をやめて、特定の土地の行政権や徴税権を授与するようになった。これがプロノイアと呼ばれるようになる。プロノイアは「配慮」という意味である（中谷2020、p.240）。コムネノス朝の皇帝は、軍人にプロノイアを給付した。プロノイアは軍事奉仕を条件に、土地その他の国税収入を当人一代にかぎり

給付する制度である（根津2008、p.65）。

マヌエル1世コムネノス（r.1143～1180）はプロノイア下賜を拡大した。少なくとも当初は、プロノイアを授与された者は、高級爵位を有するコムネノスにつらなる一門のメンバーが多かった。プロノイアは政権メンバーへの国有地の配分のように利用された。1181年には、マケドニアのモグレナ地方で、プロノイアを保有する16人のクマン人の軍人がいたことがわかる。彼らの中には、コマノプーロス（クマン人の息子）という名字をもつ者もいた（根津1999、p.177）。

### <3.2.3> 第3紀（1181～1390年）：教会法と世俗の法

イスラームのワクフと学説の対立の例を一つあげる。

イブン・タイミーヤ（1263～1328）の学説に従い、ある事件でワクフの「代替」は合法であるとダマスクスのハンバル派のカーディーによる判決が出されたとき、これに憤慨したシリアのハンバル派の大カーディーが1357年ハンバル派の法学者を集めて会議を開き、違法であるという見解が支持された。しかし、合法の判決が取り消されることはなかった（堀井2004、pp.136-137）。「代替」は収益をあげるため、新しいものに取り替えるといった意味である。裁判には審級制度はないので、大カーディーといえども、判決は覆せなかった。大カーディーはもし審級があれば「上級審」にあたるものである。

1204年4月13日、ヴェネツィア海軍の支援のもと、第4回十字軍がコンスタンティノーブルの攻略に成功した。ビザンツ帝国は一時、歴史から消えた。それまでローマ人を自称していたビザンツ人は、コンスタンティノーブルの陥落

によって、ヘレネス（ギリシア人）を自称するようになった（井上1998、p.210-211）。

半世紀のち、1258年、モンゴルのフラグの侵攻で、バグダードが陥落した。フラグは現イラン北西端のタブリーズに都を置いて、イル・ハン国（1258～1353）を建国した。第8代君主オルジェイトゥ（r.1304～1316）は離婚問題でシーア派の大学者アッラーマ・ヒッリー（1325年没）に助けられたという話が伝わる。ヒッリーは取引の規定を整備・拡大し、相続法や礼拝の時間の計算に数学を導入した（菊地2017、p.67）

東ローマ帝国では、14世紀にマタイオス・ブラスタレスやコンスタンティノス・ハルメノプロスといった法の専門家が輩出された。ブラスタレスは『シュンタグマ・カタ・ストイケイオン』という著作で教会法と世俗の民法を調和させようと試みた（ヘリン2010、p.113）。分離してしまったものを融合させるという保守的な手法である。

ハルメノプロスは1354年、『プロケイロン・ノモン』（法の手引）を著した。これは6冊本だったので、『ヘクサビプロス』と呼ばれた。この『ヘクサビプロス』の翻訳は1821年のギリシア独立戦争で誕生したギリシアの新国家が法典の基礎としたものである。（ヘリン2010、p.114-115）。このときにできた法典は20世紀に入っても効力があつた。

バルカン半島ではオスマン勢力が拡大を始めていた。オスマン朝は1360年、アドリアノーブル（ハドリアヌス帝の町）を占領し、ここをエディルネと改称して、都を置いた。1389年にコソヴォの戦いでスルタン、ムラト1世（r.1362～1389）がセルビア、ボスニア、ワラキア連合軍を破った。1396年のニコポリスの戦いで、バヤジット1世（r.1389～1402）がハンガリー王を敗死させた。新しい時代が始まろうとしてい

た。藤波2013（p.56）は「オスマン帝国はローマの後継国家である」という論点を紹介する。スレイマン大帝等はローマ皇帝を名乗った。ギリシア語のキリスト教徒ではなく、トルコ語のムスリムによるローマ帝国の皇帝として。

### <3.3> ヨーロッパ：教皇権と所領

ビザンツ皇帝ユスティニアヌス1世（r.527～565）による554年の政教和約以降、イタリアの司教が地域の官吏任命に関与する権利が与えられた。ローマ教皇は都市ローマの行政に関与する傾向が強まった（シンメルペニツヒ2017、p.76）。

ローマ教皇はイタリアで最大の土地所有者となった。教皇の所領は「ペトロの世襲領」と呼ばれ、各地に散在した。7～8世紀頃、ラヴェンナからローマに至るイタリア中部地方には、ビザンツ帝国のラヴェンナ総督領が置かれ、半島の南端やシチリアもビザンツ帝国領であった。その他の地域の多くはランゴバルド王国（568～774）に組み込まれていた。ランゴバルドの王族はローマ教皇を支持する場合も多かったが、751年から、ランゴバルド王国軍がラヴェンナ総督領に侵入し、ローマも脅かした。ローマ教皇はフランク王国のピピンに救援を求めた。フランク王国軍がイタリアに侵攻し、756年、教皇は土地を回復した。ピピンとその子カールはローマ教皇の所領を安堵した。

ピピンはフランク人に国王として選出されていた。ピピン3世（r.751～768）はカロリング朝フランク王国（751～987）を開いた。754年、ローマ教皇ステファヌス2世はカロリング家から代々フランク人の王が選出されることを認め、ピピン親子に塗油した（菊地2020、pp.92-93）。王権と教権の癒着が始まった。

### <3.3.1> 第1紀 (761~970年): カロリング朝

フランク王カール (r.768~814) は800年にローマ教皇からローマ皇帝として戴冠された。戴冠式ののちカールは「ローマ帝国を治める...皇帝にして、...フランク人とランゴバルド人の王」と名乗った。ローマ帝国はイスラームと同様、教会 (エクレシア) としてキリスト教徒の共同体であった (菊地2020、p.97; 五十嵐2001、p.21)。フランク王国はカロリング家の王国かもしれないが、ローマ帝国はキリスト教徒の共同体としてイメージされた。

カールは教会のため司教区制を整備し、世俗領主のため伯管区制を発展させた。伯は裁判集会を開催したり、軍事動員を行ったりした。国王巡察使制度も設けて、伯爵の監視も怠りなかった。カールは貧民や弱者 (寡婦・孤児・老人)、移動する旅行者・巡礼・商人を保護し、国内の教会、道路、森林を管轄した。

国王は税金の徴収を兼ねて、全国を移動した。巡行でその地の生産物を消費し、各地の有力者と仲間意識を深めた。巡回時に、国王裁判所が開廷され、その地域のもめ事が処理された。国王や宮宰などが裁判官になり、廷臣が判決発見人になった。(山内2004、p.71)。

教皇ハドリアヌス1世 (r.772~795) は774年、カールにディオニシアーナを送った。ディオニシアーナがカノン法典となり、教会法の骨格が作られた。ディオニシアーナは6世紀初頭に、教皇文書館長ディオニシウス・エクシグウスが編集した文書である。このカノン法典は802年のアーヘンの教会会議で、ハドリアヌス法典として公示された。(山内2004、pp.141-142)。

789年にフランク族のサリカ法典が改定され、『一般訓令』が發布された。フランク王国では、ナルボンヌ (フランス南部地中海側) にいた

ゴート人、アキテーヌ (フランス南部大西洋側) にいたローマ人、クール＝ラエティア地方 (スイス東部) にいたザクセン人などの民族の法も尊重された。802年に法改革が実施され、国王巡察使が派遣されるようになり、12歳以上の王国民一般に対して、君主への誠実宣誓が求められた (菊地2020、pp.114-115)。

東フランク王国 (843~911) はカロリング家の断絶で、911年に崩壊した。911年以降、選挙王政国家となり、ザクセン朝ドイツ王国 (919~1024) 第2代のオットー1世 (r.912~973) が962年にローマ皇帝として戴冠されて、中世のローマ帝国 (962~1806)、いわゆる神聖ローマ帝国が始まった (神寶2002、p.177)。

以後、ローマ教皇は皇帝への誠実誓約を義務づけられ、皇帝の上位性が確認された。誓約の後、ローマ教皇は神として聖別された。神であるローマ教皇から皇帝が戴冠されることによって、皇帝の権威が高められた (神寶2002、p.165)。皇帝権の根拠は「神から賦与された実施の力」であった (神寶2002、p.165)。この時点で、政教の争いは、皇帝上位であり、政教一致である点で、世界の他の地域と同等である。

### <3.3.2> 第2紀 (971~1180年): カノン法の整備、俗は聖ではない

法を守らせるための手法の一つとして、法共同体からの追放がある。ゲルマン法にはアハトと呼ばれる追放刑があった (山内2004、pp.48-49)。法的保護が奪われる。宗教界であれば、破門である。

990~1110年頃に、西欧で「平和」の制度が浸透した。一つの城砦を構えて、その地域一帯を支配する一円領主制が確立する時代に、人々は神の平和、神の休戦を求めた。当時はまだ権利主張の一つとしてフェーデと呼ばれる実力行



使が認められていた。フェーデは名誉を回復するための復讐である。領主は一族郎党や同盟者を巻き込んで争った。教会は弱い者への暴力や財産の強奪を止めさせるため、神の平和を宣言した。フェーデが認められているからと暴力をやめない領主を、教会は破門した。神の休戦を提案する時もあった。例えば、金曜日の日没から月曜日の日の出まで、休戦を守らせた。祝日停戦みたいなものである。

神聖ローマ皇帝ハインリヒ4世（r.1084～1105）は1085年に聖なる者として「マインツの神の平和」を宣言し、1103年に俗なる者として「マインツの帝国ラント平和令」を公布した（山内2004、p.111）。教権と俗権を区別する意識はあったが、皇帝は両権を握っていた。この平和令で4年間フェーデに歯止めをかけ、放火、傷害、殺人、窃盗などに対して、両目または手を失うという身体刑を科した。

マインツには8世紀半ばからドイツを統括する首位大司教座が置かれていた。1356年の金印勅書ではマインツ大司教が選帝侯の一人となった。ドイツ国王の戴冠式はマインツで举行され、マインツ大司教が皇帝に次ぐ位にあった。1244年に都市マインツはマインツ大司教から特権を認められて、自由都市となった。

山内2004（p.86）は、フランスでは城主となる貴族が11世紀から多数現れ、城を中心に周辺の住民の安全を守り、租税を徴収し、通行税を取り、裁判を行う、いわゆるバン領主支配が行われたという。城主（バン領主）が領内住民にバン（仏ban）の権利を行使した。軍事的に住民を戦闘員として動員したり、行政的に城郭や道路などのインフラを住民に整備させたり、司法的に平和侵害者を処罰する権利を行使した。とくに重罪犯（殺人や放火など）に対して、体罰を科する権利を意味する流血裁判権もバン領

主がもった。

経済的なバン権として、水車・パン焼きかまど・ブドウ搾り機を強制的に使用させて手数料を取り立てる使用強制権（バナリテ）が有名である。ただし、水車の強制使用で、小麦の10分の1ほどを手数料として徴収したとしても、脱穀という重労働を軽減させたという意味で、住民に対する貢献であったという理解も可能である。ブドウ酒先売特権（banvin）では、領主のブドウ酒を復活祭から40日ほどでまず販売したのち、農民のブドウ酒販売が許された。バン権という用語を使って、領主権が表現されていた。

ヨーロッパ中世の職業を理解するため、祈る人（司祭）、戦う人（戦士）、働く人（生産者）という3つの職能集団に分けることがある。これはジョルジュ・デュメジル（1898～1986）が唱えたイメージであり、フランス北部ランの司教アダルベロンによる1027年の詩に出てくる分け方である。働く人の意味が従属的な農民か、企業家的な生産者かに関しては学説が分かれる（ル＝ゴフ2014、p.38）。

中世の大学では自由学芸（リベラルアーツ）が教えられた。7自由学芸は言葉に関する文法学、修辞学、弁証法（論理学）と、数に関する算術、幾何学、音楽、天文学からなり、12～13世紀には大学教養課程の基本となった（ル＝ゴフ2014、p.36）。これは5世紀のカルタゴの人、マルティアヌス・カペッラの書籍で提唱された自由七学科（artes liberales）以来の分類法であった。教養課程の上に法学部や医学部が置かれ、最上位に神学部が置かれた。法学部では教会法とローマ法が教えられた。ローマ法は万民法に対するローマ市民法 civil law という意味で民法と訳されることもある。

カノン法は、当初は、俗人も裁いていた。聖

と俗は教皇革命（聖職叙任権闘争）の時代に人事権を争った。皇帝ハインリヒ2世（r.1014～24）の時代には、皇帝が司教、大修道院長の叙任権を有した。王室礼拝堂が帝国行政の要となり、国王は「神の代理者」と位置付けられた。皇帝は司教座聖堂参事会員として、キリスト教会にかかわった（神寶2002、p.166-167）。

皇帝ハインリヒ3世（r.1039～56）は、1046年、聖職者による聖職売買を禁止するため、教皇レオ9世（r.1049～54）らを任命した。神寶2002（p.168）はこの状況を「ビザンツ的な皇帝教皇主義」と表現する。

1050年頃、『ローマ法大全』の一部である『学说彙纂』（いさんディゲスタ）がピサの図書館で発見された。聖職者がこれを熱心に読み、ボローニャ大学で教えられるようになった（長谷川2014、pp.189-190）。叙任権闘争の時期（1049頃～1123頃）にローマ法が継受され、その後、1140年頃に、修道士グラティアヌスが『教令集』をまとめ、14世紀に『教会法大全』に結実する形で、教会法が整備された。

1059年の教皇選挙法では、神であったはずの皇帝たちが教皇選挙から外され、枢機卿だけに教皇の選出権が与えられた（長谷川2014、p.191）。1075年には、教皇は皇帝を罷免できるし、皇帝への誠実宣誓からその臣下を解放させることができると主張された。教皇は皇帝の上に立ってしまった。そして、1077年のカノッサの屈辱を迎える。

ローマ教皇グレゴリウス7世（r.1073～1085）はドイツ国王（r.1056～1105）ハインリヒ4世の廃位宣言を行った。この戦いはどちらが勝ったとも言えない。のちに、ハインリヒ5世（r.1106～25）も諸侯を治めることができなかった。1110年、彼はローマ教皇と交渉して、教皇が保有するレガリア（Regalia）を王に返還することを求めた。

帝国内所領の半分近くを保有する聖界諸侯（司教、修道院長）はレガリアを放棄すると、教会財産がなくなると考え、ハインリヒに抵抗した。1122年ウォルムス協約が結ばれた。ウォルムス協約も妥協の産物であるが、聖職者の叙任権をめぐって、基本的には、俗権（皇帝・国王の権利）と教権（教会の権利）が明確に分かれるようになった。ある意味、政教分離である。

司教を任命すると、司教は司教領という世俗の領主と同等の権限を持つ領主になるので、聖職叙任権を持つ者が経済的・軍事的に有利になる。司教領と異なり、世俗領は国王・皇帝によって認められなければ相続できなかったとはいえ、基本的には長子による世襲制であった。それに対して、聖職者は子を持たないので、叙任権を持つもの、すなわち人事権を持つ者が自分の味方を増やすことができた。多くの場合、領地を相続できなかった有力貴族の次三男が聖職者になり、司教領の領主になった。

その後、徐々に司教の裁判権が限定され、教権の範囲が狭まった。人に対する裁判権として、聖職者、学生、十字軍士に対しては、裁判管轄権が教会にあった。学生は、知を学ぶものとして聖職者と同じく、教会関係者である。

イギリスでは、プランタジネット朝初代のヘンリ2世（r.1154～1189）の時代に巡回裁判制度が確立して、全国に共通の法（コモン・ロー）が生まれたと言われる（新井1973、p.50）。コモン・ロー裁判所として財務裁判所、民訴裁判所、王座裁判所が1230年代までに創設された。ヘンリ2世はイングランドを領有する国王であると同時に、ノルマンディ公領、アンジュー伯領、アキテーヌ公領をフランス国王の下で領有するフランスの大貴族である。フランスの西半分がヘンリ2世の土地であり、国王として33年の在任期間中、ヘンリ2世がイングラ

ンドに滞在したのは13年間にすぎなかった。国王がいないことが多いイングランドの、全国を巡る国王裁判所でコモン・ローが生まれた。

ヘンリ2世より前の時代には神判（神明裁判）や追放刑による裁判が多く実施されていたが、ヘンリ2世以後、徐々に決闘裁判、証拠に基づく裁判、教会裁判所（聖）と国王裁判所（俗）の区別、刑事裁判における陪審制度の導入、不動産に関する人民間訴訟（common plea）としての民事裁判の増大、令状制度の発展、判例法・手続法の発展など、近代につながる法制度への転換が見られた（児玉2014、2016）。

### <3.3.3> 第3紀（1181～1390年）：刑法、大逆罪、法律家、家族の誕生

第3紀はほぼ中世盛期になる。教皇が俗界を統治しようとして失敗して、政治（俗界）と宗教（聖界）の分離が現代人に理解しやすい形に整われ始めた。「1159年から1303年にかけての著名な教皇は、皆法学者であった。この事実、法律を定め、執行することへの教皇権の関心の高さを物語っている」（サザーン2007、p.147）。

ル＝ゴシュ2016（p.163-164）によると、12世紀に、法という、自律的な新しい分野が分離し、その後、その他の、文学、医学、科学、政治なども分離する。君主国家の出現とともに、すべての現象を扱っていた神学が特殊な領域に押し込まれた。

現在、刑法は通常、罪と罰とを規定した法と理解されている。抽象的には古代から刑法はあったが、刑法という概念が現れるのは1200年頃だという説がある（山内2004、p.102）。世俗と宗教が切り離され、俗界では刑罰、聖界では改心を求めるようになった。それ以前は「和解」が推奨されていた。刑法が根付いて、罰と

して犯罪と同程度の苦痛刑が科され始めた。タリオの法のように。

カトリックで異端者に対する極刑として火刑が定着したのは、1224年、皇帝フリードリヒ2世（r.1220～50）がロンバルディア地方の異端に対して発した法令の規定がきっかけであったと言われる（印出2014、p.106）。それ以前の、1199年にグレゴリウス9世の『教皇令集』で異端が大逆罪とみなされた。ヨーロッパで主権概念の基礎になる「大逆罪」の発想はカノン法から生まれた。

シチリア生まれの皇帝フリードリヒ2世はレガリア（帝国高権）の多くを「諸侯法」（1220年、1231/32年）で諸侯に譲った。レガリアは具体的には鉱業権、採塩権、関税徴収権、貨幣鑄造権などである。領域支配権を貴族層が手に入れ、帝国裁判権が諸侯のものになり、領邦君主が統治する領邦国家が生まれる。レガリアの内容がその後、近代国家の専有物になる。

この時期（12～13世紀）に、いわゆる地代荘園制が確立する。共同体の慣習法は判決として記録され、いくつかの法書としてまとまった。もっとも有名なものはザクセンシュピーゲルである（ドイツ語版1224/5年）。これは、ザクセンの法をシュピーゲル（鏡）のように正確に照らしだそうとしたものである。

『イングランドの法と慣習』（1250年頃）は、国王裁判所裁判官ヘンリ・ド・ブラクトン（？～1268）が国王裁判所の判決をもとに記したもので、コモン・ロー（common law：普通法）の最善の記述であると評価されている（山内2004、p.96）。ブラクトンは「国王は、いかなる人の下にもあるべきではない。しかし、神と法の下で統治すべきである。何故ならば、法が国王をつくるのであるから」と記した（大浜2016、p.110）。ボス争いを防ぐため、法と神を

国王より上に置いた。これは、法を発見する裁判官や神の声を聞く聖職者の意見にも耳を傾けなさい、と国王に諫言していると理解できる。

英国史では1215年にジョン王に突きつけられたマグナ・カルタが有名であるが、これはローマ教皇の助力も得て、9週間で無効にされた。マグナ・カルタに象徴される王権の濫用からの自由や人権尊重は中世英国の伝統ではないが、近代英国で伝統になった<sup>(2)</sup>。なお、ジョン王の時代にまだ続いていた神判を批判した教皇インノケンティウス3世(r.1198~1216)は、1215年の第4回ラテラノ公会議で聖職者が神判に関わることを禁止した。結果として西欧では神判(神明裁判)が衰退した。

イギリスの「法の支配」はコモン・ローの支配であった(新井1973、p.68)。その伝統を作り上げたのは法学院である。ミッチェル1971(pp.53f.)がその経緯を次のように説明している。

マグナカルタの第17条で、民事訴訟は巡回裁判ではなく、一定の場所で開廷されると規定され、民訴裁判所はウェストミンスター宮に置かれた。ここでは、主に不動産訴訟が扱われた。裁判官や弁護士がその近くに集まるようになり、法曹学院が設立された。テンプル騎士団が置かれていた土地に、14世紀中に、インナー＝テンプル法学院とミドル＝テンプル法学院が結成された。その後、リンカン伯の建物にリンカン法学院、グレイ＝ド＝ウィルトン邸にグレイ法学院が創建された。現在もイギリスで、法学院は法廷弁護士(バリスター)や裁判官の養成機関として機能している。

中世の間に、社会の最小の共同体の単位は、それまでの種族・部族・氏族的なつながり(部族法)が薄れて、家という聖域(アジュール)に押し込められた。中世の西欧は単婚小家族に

なっていたという理解もあるが、家ではまだ親族が大きな影響力をもっていた。土地は親族に帰属すると考えられていて、土地の譲渡は親族の同意を必要としていた。ちなみに、西欧の研究者がよく主張するように「単婚小家族」を数だけで認定すると、中国は古来、5人ほどで構成される単婚小家族である。

12世紀に教会の門前での結婚式が始まり、1215年の第4回ラテラノ公会議で、結婚の手続きのマニュアルが作成された。以来、神によって結びつけられた夫婦は原則、離婚が禁止され、神(聖職者：カノン法)によってでしか、その結びつきが解かれることはなくなった。

Brand2021が調べた13世紀(1199~1307)の寡婦産の抗弁書によると、寡婦は通常、その資産の3分の1を生涯利用できた。夫の資産は死亡時ではなく、結婚の際の資産が対象となった。その他、同意による寡婦産もあった。寡婦産の訴訟で、近親側は捺印証書による記録がなければ、寡婦産は認められないと主張し、他方、寡婦側は結婚式での約束を聞いた証人だけでなく、陪審の支持も得て、寡婦産の権利を主張した。文書記録と人(集団の記憶)が争った。

親族と対立して勝利する家族が生まれた。西欧でも、13世紀に苗字が発達する。その頃、職業として、金属、中でも鉄製品を扱うことが多くなり、鍛冶屋、金物屋などが増加した。「ル・ゴフ」という苗字はケルト語の一つのブルトン語で鍛冶屋を意味するという(ル＝ゴフ2016、pp.144-145)。

## ＜まとめ＞

人類にとって所属意識は自己を保持するため、に重要である。古代の神社・社稷にかわって、中世では宗教が所属意識に大きな役割を果たし



た。しばしば宗教は経済力を発揮した。子供の教育や社会秩序（法秩序）の維持のためにも宗教が必要とされた。宗教を法と区別するのは、中世では、まだ難しいかもしれない。

中世第1紀（761～970年）に君主を神にしようとする活動が見られた。呪術的発想が残り、神判も利用された。しかし、イスラームのように行政と聖の分離が始まった地域も多く、神学と法学で学派が生まれ、正統と異端の争いが始まるほどに、さまざまな思想が生まれた。

第2紀（971～1180）では、神である君主の上に立とうと、学識者（士大夫、ウラマー、聖職者）が平和を盾に、領域支配に乗り出していた。この時期に、行政権の争いから離れて、心の平和を求めるスーフィズムや仏教・道教のように、現代の宗教（精神的な内容）の原型になるものが登場し、法も整備されるようになった。

第3紀（1181～1390）には宗教は君主のもとで法体系を整備するか、あるいは、宗教施設で修行に励むかの二者択一を迫られた。朱子学の「理」のように、理想型に従って、秩序を考える思考法が力を持つようになった。共同体も親族ではなく、家族と地域に根を張るようになって、その地域での慣習が法となる。慣習が判例として定着して、世俗の法が宗教の法と分離していった。

## 注

- 1) 児島は2020年から、「経済史から見た法制度の変遷」を書いている。「序、先史時代」、「古代初期（紀元前1130～前501）」、「古代中期（紀元前500年～後130年）」、「古代後期（131年～760年）」を、『明星大学経済学研究紀要』52(1-2)、53(1-2)、54(1)、54(2)で発表した。今回の引用・参考文献の一部は、これらの論文に載っている。
- 2) 1215年、イングランド国王ジョンは封建貴族に強制されて、Magna Cartaを承認した。前文と63カ条で、国王の徴税権の制限や法の支配などが明文化された。イギリス民主主義の象徴にもなっているマグナ・カル

タは歴史上では、貴族が、貴族の一員にすぎない国王の専制を制限し、自分たちの特権＝自由を確認したものにすぎない（児玉2018参照）。端的に言えば、マグナ・カルタは自由の象徴ではなく、徴税を伴う軍事行動をしたければ、貴族にお願いしなさいと、貴族が国王に談判した文書である。原文は公開されている。原文はラテン語であるが、英文でも、  
[https://en.wikisource.org/wiki/Source\\_Problems\\_in\\_English\\_History/Appendix/Magna\\_Carta\\_1215](https://en.wikisource.org/wiki/Source_Problems_in_English_History/Appendix/Magna_Carta_1215)、などで読める。

## 参考文献

### 〔資料〕

- アリストテレス（1970）『トピカ』アリストテレス全集 2、村治能就訳、岩波書店。  
 アリストテレス（2014）『トボス論』アリストテレス全集 3、山口義久訳、岩波書店。  
 加地伸行（2007）『孝経 全訳注』講談社学術文庫。  
 小杉泰（2019）『ムハンマドのことは：ハディース』岩波文庫。  
 矢羽野隆男（2016）『大学・中庸』ビギナーズ・クラシックス 中国の古典、角川ソフィア文庫。

### 〔文献〕

- 新井正男（1973）『イギリス法の基礎』文久書林。  
 荒川正晴（他編）（2022）『東アジアの展開 8～14世紀：岩波講座世界歴史07』岩波書店。  
 五十嵐修（2001）『帝国理念の交錯-カール戴冠再考』『人文・社会科学論集』19、東洋英和女学院大学。  
 池上俊一（2008）『儀礼と象徴の中世』ヨーロッパの中世 8（池上俊一、河原温編集）、岩波書店。  
 石岡浩、川村康、七野敏光、中村正人（2012）『史料からみる中国法史』法律文化社。  
 井上浩一、栗生沢猛夫（1998）『世界の歴史 11 ビザンツとスラヴ』中央公論社。  
 井上浩一（2009）『ビザンツ文明の継承と変容』学術選書：諸文明の起源 8、京都大学学術出版会。  
 井上雅夫（2013）『カノッサへの道：歴史とロマン』関西学院大学出版会。  
 印出忠夫（2014）『異端禁圧から大逆罪へ——教令「ヴェルゲンティス・イン・セニウム」(1199年)の成立まで』、甚野2014所収。  
 エディ、ビル・（2020）『危険人物をリーダーに選ばないためにできること：ナルシストとソシオパスの見分け方』プレジデント。  
 大澤正昭（2021）『妻と娘の唐宋時代』東方選書、東方書店。  
 大月康弘（2014）「中世キリスト教世界と「ローマ」理念——リウトブランド『コンスタンティノーブル使節

- 記』における「ローマ」言説」、甚野2014所収。
- 大月康弘 (2020)「ビザンツ皇帝の帝国統治と世界認識」、三浦2020所収。
- 勝田有恒 (他編) (2004)『概説西洋法制史』ミネルヴァ書房。
- 亀長洋子 (2011)『イタリアの中世都市』世界史リブレット106、山川出版社。
- 亀谷学 (2020)「イスラーム世界の出現」、三浦2020所収。
- 川村康 (2022)「法構造の新展開」、荒川2022所収。
- 菊地重仁 (2020)「西方キリスト教世界の形成」、三浦2020所収。
- 北村厚 (2018)『教養のグローバル・ヒストリー：大人のための世界史入門』ミネルヴァ書房。
- 小島毅 (2002)「天道・革命・隠逸：朱子学的王権をめぐって」、安丸2002所収。
- 児玉誠 (2014)「ヘンリ2世と司法改革 1：イギリス中世憲法における法の支配への道」『明星大学経済学研究紀要』46(1-2)。
- 児玉誠 (2016)「ヘンリ2世と司法改革Ⅱ：イギリス中世憲法における法の支配への道」『明星大学経済学研究紀要』48(1)。
- 児玉誠 (2018)「イギリス議会の起源と発達：アングロ・サクソン時代から13世紀まで」『明星大学経済学研究紀要』49(1-2)。
- 小杉泰 (2009)『『クラーン』：語りかけるイスラーム (書物誕生：あたらしい古典入門)』岩波書店。
- 佐々木馨 (2002)「顕密仏教と王権」、安丸2002所収。
- サザーン、R.W. (2007)『西欧中世の社会と教会：教会史から中世を読む』上條敏子 (訳)、八坂書房。
- 斯波義信 (1997a)「元の社会経済」、斯波 (1997) 所収。
- 斯波義信 [他編] (1997)『世界歴史大系 中国史3—五代—元』山川出版社。
- シャルマソン、テレーズ・ (2007)『フランス中世史年表：四八—一五一五年』福本直之訳、白水社。
- 甚野尚志、踊共二編著 (2014)『中近世ヨーロッパの宗教と政治：キリスト教世界の統一性と多元性』Minerva西洋史ライブラリー、ミネルヴァ書房。
- 神寶秀夫 (2002)「教会権力と国家権力：神聖ローマ帝国」、安丸2002所収。
- 妹尾達彦 (2020)「長安七五一年 — ユーラシアの変貌」、三浦2020所収。
- 世良晃志郎 (1977)『封建制社会の法的構造』創文社。
- 竺沙雅章 (1995)『范仲淹』中国歴史人物選、白帝社。
- デュロゼル、J-B・ (1967)『カトリックの歴史』大岩誠 (他訳)、文庫クセジュ149。
- 砺波護、武田幸男 (1997)『隋唐帝国と古代朝鮮』世界の歴史6、中央公論社。
- ドナー、フレッド・M・ (2014)『イスラームの誕生—信仰者からムスリムへ』後藤明 (監訳)、慶應義塾大学出版会。
- 中谷功治 (2020)『ビザンツ帝国：千年の興亡と皇帝たち』中公新書、中央公論新社。
- 中西竜也、増田知之編 (2023)『よくわかる中国史 (やわらかアカデミズム・「わかる」シリーズ)』ミネルヴァ書房。
- 根津由喜夫 (1999)『ビザンツ幻影の世界帝国』講談社選書メチエ154、講談社。
- 根津由喜夫 (2008)『ビザンツの国家と社会』世界史リブレット、山川出版社。
- 根津由喜夫 (2011)『図説ビザンツ帝国：刻印された千年の記憶』ふくろうの本、河出書房新社。
- ハリス、ジョナサン・ (2018)『ビザンツ帝国生存戦略の一千年』白水社。
- ハースト、ジョン・ (2019)『超約ヨーロッパの歴史』(倉嶋雅人訳) 東京書籍。
- 藤波伸嘉 (2013)「オスマンとローマ：近代バルカン史学史再考」『史学雑誌』122-6。
- ホウルト、J=C= (1993)『中世イギリスの法と社会：J=C=ホウルト歴史学論集』城戸毅監訳、刀水書房。
- 保坂俊司 (2022)『インド宗教興亡史』ちくま新書1662、筑摩書房。
- 細川滋 (1997)『東欧世界の成立』世界史リブレット。
- 堀井聡江 (2004)『イスラーム法通史』山川出版社。
- 堀越宏一 (2009)『ものと技術の弁証法』ヨーロッパの中世、池上俊一、河原温 (編)、岩波書店。
- マイアー、H. (1999)『西暦はどのようにして生まれたのか』野村美紀子訳、教文館。
- 町田實秀 (1958)『多数決原理の研究：中世の選挙制度を中心として』有斐閣。
- 松田浩道 (2022)『リベラルアーツの法学：自由のための技法を学ぶ』東京大学出版会。
- 三浦徹 (2020)『750年 普遍世界の鼎立』(歴史の転換期)、山川出版社。
- 三上真司 (2013)「Religio——宗教の起源についての考察のために」『横浜市立大学論叢社会科学系列』v.64n.3。
- 溝口雄三 (1997)「朱子学の成立」、斯波1997所収。
- 宮紀子 (2006)『モンゴル時代の出版文化』名古屋大学出版会。
- 安丸良夫 (他) (2002)『宗教と権威：岩波講座天皇と王権を考える：第4巻』、網野善彦[ほか]編集委員、岩波書店。
- 山内進 (2004)、勝田2004所収の複数の論文。
- ラーション、マッツ・G・ (2008)『ヴァリヤーギ：ビザンツの北欧人親衛隊』荒川明久訳、国際語学社。
- ル=ゴフ、ジャック・ (2014)『ヨーロッパは中世に誕生したのか?』菅沼潤訳、藤原書店。
- ル=ゴフ、ジャック・ (2016)『時代区分は本当に必要か? (連続性と不連続性を再考する)』菅沼潤訳、藤原書

店。

ロペス、ロバート・S. (2007) 『中世の商業革命：ヨーロッパ950-1350』 宮松浩憲訳、りぶらりあ選書、法政大学出版局。

和田廣 (2002) 「聖なる皇帝と異端：ビザンツ」、安丸2002所収。

Brand, Paul , (2021), 'Dower Ex Assensu and Trial by Jury and Trial by Witnesses in the English Medieval Common Law,' *Journal of Legal History*, vo.42-2.

[参考URL]

Forgotten Books, 100万冊をこえる古書のデジタル版：  
<https://www.forgottenbooks.com/en>